

# みなとびあめの「たいけんプログラム」

藍野 かつり

みなとびあめの「たいけんのひろば」は、地域のくらしの知恵や、広く歴史・文化に関わる事をこどもたちに伝える場として設置されました。主な対象はこどもですが、展示されているむかしの暮らしの道具や、遊び道具などを通して、こどもからおとなまで広く楽しんでもらえるよう、また、おとなもこどもも楽しんでもらえるような体験活動や資料展示などを行い、たいけんのひろばを運営しています。

## ▼たいけんプログラム

「たいけんのひろば」の特色といえは、ほぼ毎週末に開催している「たいけんプログラム」です。平成十六年の開館から昨年度末までの間にのべ七、四回のたいけんプログラムを実施し、一万二〇七七人に参加してもらいました。

たいけんプログラムは、むかしのおもちゃ作りなどの創作体験、むかしのくらしの道具を使う体験、博物館の施設や役割を周知するものなど多岐にわたります。どのプログラムも気軽に参加してもらえるように、二時間程度の体験活動となるように企画しています。これらの体験が、地域の歴史文化に興味を持って

もらったり、文化財保護の意識を持ってもらったりするきっかけになるようなプログラム作りを心掛けています。

これらプログラムの企画・運営は学芸員だけでなく、たいけんのひろばボランティアも担っています。たいけんのひろばで活動するボランティアスタッフには、手芸や工作などの特技を持つ人や、紙芝居、ネイチャーゲームといった他団体ですでに活動している人など、「その経験をたいけんのひろばでも活かしたい」と参加している人もいます。ボランティア企画として、彼らの経験・技術をたいけんのひろばの活動に活かし、歴史博物館らしい地域の文化や歴史の解説を織りこんだプログラム開発を職員と一緒に行っています。

これまで、さまざまなたいけんプログラムを企画し、実施してきました。定番となったプログラムも、参加者の反応を見て、プログラムの進め方や下準備の方法などを工夫し、少しずつ進化しています。好評を得て定番化したものだけではなく、ありません。中には、企画段階でお蔵入りになったもの、実施したものの、実際に参加者の反応が思ったほど良くなかったため一度きりになってしまったものもあります。さまざまなプログラムの中か

ら、博物館らしい展開をみせたプログラムについてご紹介します。

## ▼織り姫プロジェクトと「布をつくってみよう」

平成十七年度に布を織る仕組みを知ってもらいたいと学芸員が企画したプログラムがありました。段ボールを使った簡単なものですが、参加者の反応はそれほどよいものではありませんでした。このプログラムのサポートに参加していた複数のボランティアスタッフから、「このプログラム、アイデアはいいのに……」「もっと面白くできるはず」という声がありました。

そこから、「布を織る」ということについて分かりやすく、身近なものを利用してできるプログラム作りがボランティアスタッフの中で立ち上がりました。「織り姫プロジェクト」と銘打って、月に一度のペースで勉強会が行われました。(写真①)

単に布を織る、ということではなく、高機の機構が分かるようにした方が良いのではないかなど、プログラムの骨格となる部分が話し合われ、プログラムで使用する織り器の開発が行われました。



写真①

ムの背景にはこのようなボランティアスタッフの工夫がありました。

多くのボランティアスタッフが関わって成長した「布をつくってみよう」のプログラムですが、「高機の仕組みを伝えるものだから本物がそばにあると分かりやすい」とか、「本物の機も使えるならもっと興味を持ってもらえるのではないか」という意見が出るようになりました。そこで、織り姫プロジェクトは収蔵資料の高機を復元する次のステップへと進みました。

当時、当館には体験活動に使えるような高機はなく、寄贈された機の部品があるだけでした。さらに、きちんと組み立てられるかどうか、その部品も揃っているのかどうかさえ分からないものでした。そこで、これらの資料を調査し、組み立てることになりました。調査の結果、間丁、ロクロがないこと、箆棒の一部

が破損している状態であることが分かりました。そこで、地元の建具職人さんに相談し、足りない部分を作ってもらい、高機を復元しました。(写真②)

次に必要なのが、布を織るための経糸の準備です。これについては、市内で裂き織り作家として活動されている方に指導してもらいました。ヘバの使い方、経糸の作り方、高機への経糸のかけ方などを複数回にわたって教えていただき、布を織れるようにしました。そして、平成二十二年度には高機で裂き織りのコースターをつくるたいけんプログラムができるようになりました。(写真③)

## ▼「みなとびあめん部」の発足

機の復元を通して、ボランティアスタッフ限定の活動ではなく、興味のある市民の方々とともに活動することや、布作り

に関わる他の工程も知って活動の幅に広がりを持たせたい、という意見が出てきました。そこで、平成二十四年度から、たいけんのひろばの活動に「みなとびあめん部」を発足させました。この「みなとびあめん部」は、博物館資料として収蔵されている資料群を用いて、布生産にまつわる一連の工程を再現し、興味のある方々とともに体験すること、道具の意味、使い方、技術などについて体験から学ぶことを目的としました。

毎年四月に部員を募集し、二か月に一度活動しています。部員の年齢層も幅広く、小学生から大人までいっしょにワタ打ちや糸紡ぎなどを行っています。初年度から活動している部員が多く、今では難なく糸紡ぎができるようになっていきます。昨年度は、自分たちで紡いだ木綿糸を緯糸にしたコースターの製作にまで到達しました。四年目となる今年度は、経糸も自分たちで紡いだ糸を使って、白木綿を織ることを目標に活動しています。

## ▼今後の展望

布の生産に関わる技術はそれぞれ奥深いものです。機織りひとつとっても、さまざまな技術を要します。より高度な製織技術を学ぶという方向性もあるでしょう。

染織や、原料となる棉の生産など、幅広くその技術を学び、すべての工程での手仕事を体験する、ということも考えられます。それぞれの技術に興味のあ

る市民の参加により、活動の輪が広がるかもしれません。

蒲原平野の布生産の歴史について考えると、信濃川・阿賀野川の自然堤防沿いの地域などでは、江戸時代から明治時代にかけて、綿花栽培がさかんでした。大野綿・新飯田綿など、越後国内でのブランド化も進んでいました。また、亀田綿・葛塚綿・小須戸綿・白根絞・吉田白木綿などは、地域の中で製糸から製織への分業がなされるなど、地域全体で支えられていたブランドでした。生産の歴史については追体験を経たからこそ理解できることもあるかもしれません。地域の布生産の歴史を掘り下げることも興味深いことになりそうです。

新潟市内では、現在、地域で亀田綿や小須戸綿の掘り起こしが行われ、それぞれの地域の文化の核とする動きがあります。各地域で活動している人々と交流することで新たな活動の芽が生まれるかもしれません。

活動の展開はいくつかの方向性が考えられますが、いずれにしてもたいけんのひろばを舞台に、一般市民の参加者、ボランティアスタッフ、職員の皆が楽しく学び、もっと知りたい、体験したいという好奇心が持続するような、幅広く奥深い体験活動を目指したいと思います。

また、この例にとどまらず、ひとつのプログラムが次のステップにつながり、新たな博物館活動を生み出す「活動の種」を見つけられるよう、アンテナを張った運営を心掛けたいと思っています。

(あいの かおり 学芸員)



写真②



写真③